

東京大学教育 GP シンポジウム

ジェネリック・スキルとしての

討 議 力

主体的な学びの作法



教員と学生が
対面する環境を活かして、
いかにして深い学びを
可能にするか？

卒業後の学生の
社会人としての能力育成と
どのように効果的に
接続できるのか？

2009年11月13日(金) 18:00~20:00

東京大学駒場キャンパス 11号館1102

主催 ● 東京大学教養学部附属教養教育開発機構

東京大学教育 GP 「PISA 対応の討議力養成プログラムの開発」

後援 ● 駒場友の会

東京大学教育 GP シンポジウム

ジェネリック・スキルとしてのの

討議力

主体的な学びの作法



2009年11月13日(金) 18:00~20:00

東京大学駒場キャンパス 11号館1102

主催●東京大学教養学部附属教養教育開発機構

東京大学教育 GP 「PISA 対応の討議力養成プログラムの開発」

後援●駒場友の会



教養教育開発機構教授
山本 泰

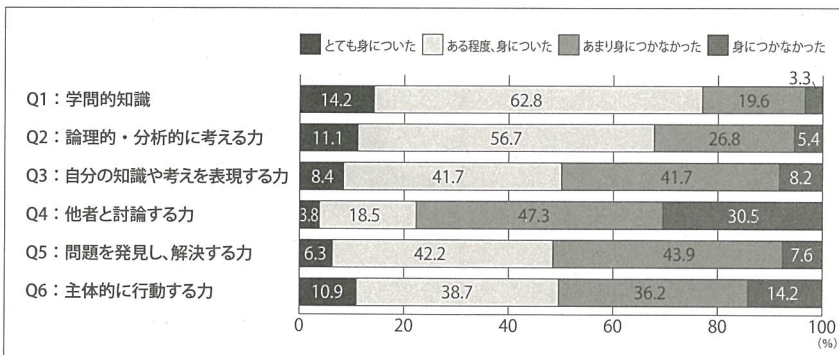
このシンポジウムは教育GPの事業の一環として行うものです。

まずは主旨を説明させていただきます。このシンポジウムは教育GP、つまり質の高い大学教育推進プログラムの「PISA対応の討議力養成プログラムの開発」(※PISA=学習到達度調査)のために行うものです。これをひと言で言うと、「PISA対応の新しい教育モデルの構築を目指し、他者と討議する力を養成するプログラムを教養教育に導入する」というパイロット的な教育開発を中身とするものです。

どうして東京大学教養学部がこういう申請をするに至ったかという直接の理由をお話します。これまで教養学部はさまざまな教育改革を進めてきましたが、教養学部の出口調査として、教養学部の2年次が修了して本郷キャンパスに進学する段階の学生に「教養教育の達成度調査」というものを実施しました。この調査は2007年から実施してきており、設問はコンピテンシー(能力評価基準)を計るPISA的なものになっています。

調査結果を見てみると、それぞれ「学問的知識」や「論理的・分析的に考える力」、「自分の知識や考えを表現する力」、「問題を発見し、解決する力」は2年間で身についたと答えている学生が多いのですが、「他者と討議する力」が2年間で身についたという人

●教養教育の到達度調査(2008年)



は、「とても身についた」が3.8%、「ある程度身についた」が18.5%と非常に少ないのです。教養教育達成度調査では、知識などは身につくけれど他人と議論して自分の意見と自分と違う意見を突き合わせるといったことが、極めて不得意な学生像が見えてきました。「東大生だからこそ」という側面もあるかもしれませんが、そんな不備に気がついたので。

これはなんとかしなければいけないということで、この教育GP「PISA対応の討議力養成プログラムの開発」を立ち上げた次第です。

2009年9月に、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学、南カリフォルニア大学に研修に行ってきました。2008年は同じくアメリカのハーバード大学とマサチューセッツ工科大学に行きました。このように、外国の事例などを見て研修もしています。

向こうの大学のホームページに、「TELL ME AND I FORGET」——口で教えてもらっただけではすぐ忘れてしまう——という言葉がありました。つまり、自分がなにかしら関わりを持つときちゃんと理解できるということです。後ほど司会をしていただく永田敬先生によると、これはベンジャミン・フランクリンの言葉だそうです。ベンジャミン・フランクリンは凧を飛ばして雷を電気だと発見した人ですね。やはり自然科学のセンスは、こうやって確かめることに重きを置くようです。海外の大学がこうした教育モデルを採用していることも、非常に参考になるのではないかと考えています。

これらのことを含めて、今日の議論を進めていきます。

最後に、今日会場にお集まりいただいたみなさんの中には、東京大学の学生もいますし駒場の教職員もいます。外部の方では文部科学省や経済産業省からもご来場いただいていますし、他大学で教育開発などに従事されている専門家の方もいらっしゃいます。東京大学の学生のお父さん・お母さんというPTAの方も来てくださっているとしますので、さまざまな立場、考えの人々とともに幅広く議論を進めていきたいと思っています。

Student Centered Education
TELL ME AND I FORGET,
SHOW ME AND I REMEMBER,
INVOLVE ME AND ...
I UNDERSTAND.

<http://www.thirteen.org/edonline/concept2class/inquiry/index.html>

CONTENTS

趣旨説明	2
教養教育開発機構教授 山本 泰	

① シンポジウム 授業の中の討議

PISA対応の討議力養成プログラムの開発	6
教養学部長 山影 進	
基調講演 討議を通じて深く学ぶ	8
前ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター長/東京大学理事 江川 雅子	
生命科学授業担当の視点から	16
教養学部教授〈生物〉 渡邊 雄一郎	
ティーチング・アシスタントの活用推進	20
教養教育開発機構特任講師〈ALESSプログラム〉 板津木綿子	

② パネルディスカッション

駒場の授業での討議をどう活用するか	26
司会 永田 敬 教養学部教授〈化学〉 林 揚哲 経済産業省経済産業政策局産業人材政策室人材開発担当企画官 荒巻 健二 教養学部教授〈経済〉 佐々 真一 教養学部教授〈物理〉 齋藤 希史 教養学部准教授〈漢文学〉 江川雅子/渡邊雄一郎/板津木綿子	
シンポジウムを終えて	42
教養学部副学部長 嶋田 正和	

③ [資料] 教養教育開発機構の取組

PISA対応の討議力養成プログラムの開発	44
----------------------------	----